

月日: 2020年 7月 14日 (火) 時間: 15:00~17:00 場所: 福岡市科学館 4階 交流室

出席者:

<外部評価委員>

- 伊藤 克治 福岡教育大学 理科教育ユニット(化学)教授
- 栗原 隆 シンフォニックアソシエーション 代表
- 縣 秀彦 自然科学研究機構国立天文台 天文情報センター 准教授 普及室長・国際普及室長
- 緒方 泉 九州産業大学 教授 博士(文学)

<事業者>

- 板里 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 代表取締役
- 森岡 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 取締役
- 伊藤 福岡市科学館 館長
- 高安 福岡市科学館 PJアドバイザー
- 高橋 福岡市科学館 事業総括責任者
- 吉武 福岡市科学館 事務局長
- 丹野 福岡市科学館 ドームシアターリーダー
- 小堀 福岡市科学館 ドームシアター担当者 (敬称略)

配付資料: 福岡市科学館年報-2019年度版-
福岡市科学館季刊誌(2019年度発行版)

■ 議事内容(概要)	発言者
<p>1. 委員長の選出</p>	
<p>要綱第3条にもとづき、委員長を互選の結果、満場一致により栗原氏が選出された。</p>	
<p>縣委員は東京からリモートで参加された。</p>	
<p>2. 2019年度事業報告</p>	
<p>事業者から、年報および参考資料に基づき前年度の事業内容等について報告。</p>	
<p>3. 委員意見交換・評価等</p>	
<p>事業報告を受け、各委員から意見や評価、提言等が出された。</p>	
<p>年齢層の集計はしているか。</p>	緒方委員
<p>チケットの券種でしか把握ができていない。</p>	吉武
<p>印象だけではなくエビデンスが欲しい。イギリスの科学館ではシールを貼ってもらって調べていた。これだけの利用者が入っているからいいマーケティングになるはず。</p>	緒方委員
<p>アンケートを昨年と比べると満足度があがっている。またはじめて来た方が減って10回以上の方が極端に増えている。定着してリピーターが増えてきている。この2つの点は非常にいい傾向。</p>	栗原委員長
<p>「ネイチャークラブ」「ロボットクラブ」「プログラミングクラブ」の参加者数は多いが、逆に「実験研究クラブ」「デジタル工作クラブ」など創造系が少ないのがもったいない。また、大人に対してのハイエンドな知識を得られるクラブがもっとあるといい。</p>	栗原委員長
<p>クラブに関しては指摘通りなので、今年度は各先生と面談して人数の調整を行った。「大人のプログラミングクラブ」は今年度リモートで実施したが、昨年度よりも受講者が増えた。</p>	高橋
<p>全体的に見て中学生、高校生の利用が少ないので、3月に中学生を対象にしたセミナーを行おうとしたが、コロナ禍で中止になったのが残念だった。</p>	板里
<p>科学イベントで中高生を集めるのは非常に難しい。中高生のニーズを探ったことがあるか。</p>	伊藤委員
<p>マンモス展の期間中にプロジェクトMという高校生対象の企画でアンケートを取ってデータ分析はしたことがある。</p>	高橋
<p>館長がサイエンスカフェを何回か行っているが、中高生の参加はあったか。</p>	栗原委員長
<p>中高生は少ない。対象は中学生より上としていたが、中高生は1~2人程度。</p>	伊藤

年報の「はじめに」のページに書かれていることに立ち返り、戦略を立てていくことが大事。ここで打ち出しているのは市民が主体ということ。“学習支援”“育ち支援”、2つの支援をプログラムの中に取り込んでいこうという決意を感じる。また、科学館の内部の人たちの育ちをあわせてほしいといけない。学習支援をしていく館というのを目指すならば、博物館相当施設の申請をした方がいい。

緒方委員

学芸員という専門職の名前は使っていないか。

緒方委員

使っていない。専門施設の経験がないのと、資料の貸し借りをやる経験がないため。

高橋

展覧会を行う上で学芸員がない館には資料を貸しづらいと思われるかもしれないので、学芸員の資格を持っているスタッフがいたら発令しておいた方がいい。専門家集団がいるからこそ育ち支援、学習支援ができるようになる。

緒方委員

初年度に発令は館長からもらっている。

丹野

そういう人たちが何人いるのかが大切な要件になる。

緒方委員

この年報は大変すばらしい資料。昨年度の年報もあると考察がしやすい。

縣委員

4階には中高生がたくさんいるイメージだったが、キャリア教育として様々な分野で近隣の大学と協力してなにか事業ができればいいと思う。福岡市科学館の理念を生かすには、中高生が主人公として主体的にできる仕組みがないといけない。東京の高校ではプラネタリウムの番組を作って発表したりしている。例えば、館内の展示物を高校生に作らせるとか、サイエンスショーを高校生にさせるとかできるといい。

縣委員

そうした取り組みを少しずつ始めており、「プロジェクトM」では高校生9名を集めてグラフィックを完成させた。こういう経験を生かして展示を作ることに取り組みたい。

高橋

また、テーブルサイエンスをボランティアにやってもらう仕組みを作っている。大学生から60歳を超える方まで生き生きとやっている。市民が科学館の運営にかかわるといいう取り組みも始まっている。

せつかく高校生が科学館に来ているので、休憩時間ごとに高校生が作った動画を流すなどどうか。科学館でしか見られないなどの仕掛けをすると面白い。

縣委員

科学館の活動をするうえで苦しいことは要求水準があること。質を上げるというところでは市はみてくれない。市民が主体となるアウトリーチ活動をしたいと思っているがそれも同じ1回という扱いになる。

伊藤

毎年のようにこれだけ数をこなすことに一生懸命やっているのがわかる。それも大切だが、あわせて質を上げていくことが利用者にとってよりいい科学館になっていくはずだ。福岡市の方にもこの議論を聞いてほしい。

緒方委員

交流室に高校生が来ていただけるというのはありがたいが、トラブル対策ですごく時間を使っている。それでも要求水準では活動として。そこで今年は年報P43に記載した。要求水準以外の活動も質を上げながらやっているということを認めてもらいたい。

伊藤

達成指標と成果指標の2つで評価しないとこなすこと自体が目的になってしまう。年報を書くときは自己評価になると思うが、独自設定した成果指標についても書くべき。達成資料ばかりでは質は上がっていかない。開館前に作った資料が未来永劫使えるとは到底思えないので、状況によっては目標も変えていかないといいけない。

伊藤委員

年報P50に職員の実績を記載しているが、指定管理のこの規模の科学館で3年目くらいにこれだけ研究発表している館はなかなかない。そういうところにも力を入れている。自分たちの事業内容を俯瞰してみることができている。

高安

これによってもたらされた成果も年報に書いたほうがいいのでは。例えばこれだけ発表しているのも珍しい、職員の質も上がっている、など。

伊藤委員

年報は正式な記録であり毎年同じフォーマットで出していくというのはすごく大事。だが次の年度は何を目標として、また5年ぐらいの中期計画で何をしたいのか、何をいま課題として掲げているのが見えづらい。こういうのを簡単な文章でいいので作成したらいいと思う。

縣委員

比較材料が得られそうだとするものだけをピックアップして、A4で2枚ぐらいにまとめてほしい。それをもって福岡市にこれだけ変わってきているということを伝えたい。比較がとても重要。

緒方委員

何を評価したらいいかわからないので、ここを評価してほしい、ここを議論してほしいというポイントをピックアップしてほしい。

縣委員

アンケートに関して、やや不満と答えた方がどういコメントが書いているか気になる。

縣委員

確認する。アンケートのコメントについては毎月集めて全体会議で全スタッフに共有しているのと、館からの返信を加えたものを交流室に掲示している。

吉武

開館当初から不満の種が大きく3つあり、待ち列が長い、基本展示室はほとんど遊びではないか、特別展の値段が高い、という声が多かった。1番目と3番目に関しては解決していると思う。

伊藤

2番目の不満の対策は。	栗原委員長
基本展示室は来年度大規模リニューアルを行うが、それにあたりアンケートをとった。アンケートを基に合理的、有効的なりリニューアルを考えている。 展示の科学の本質はサイエンスナビにあるが、5階と4階で距離があり活用できてない。いまはサイエンスキャストを活用した新しい解説システムに取り組んでいる。	高橋
科学そのものが20世紀型とは違ってきている。旧来の理工系の科学館の性質と新しい科学に対応していこうとした2つのタイプがある。名古屋市科学館のような旧来の科学館がいい科学館と認識している人が多い。福岡市科学館ではいま旧来の科学館ではないことを志向してやっている。それと基本展示室との関係をどうするかが大きな課題になる。	高安
福岡市科学館はS+Cというちょっと変わった名前を付けている。クリエイターを入れてサイエンスをちょっと違った目で見るところがあったがそうすると解説が無くなってしまったというところがある。これは言われるようにここの欠点で、それを違うところで補っていかねばならない。	板里
特別展・企画展は誰が考案しているか。	縣委員
いまのところメディアからの売り込みが中心。今年度から自主企画に取り組もうとしていた。しかしコロナ禍によりリスクが大きいのので延期した。売り込み企画の中でも不満を持たれる要素として説明不足が起きがちだが、昨年のマンモス展では「いたるところでマンモス展」として独自の企画展を同時に行うことでよりマンモスを理解する仕組みを作った。	高橋
ワンチームで全体を考えているのが顕著に表れていて評価できる。持ち込み企画もどういう目で選択していくかというのが大事。	縣委員
イギリスの博物館がすごいと思うのは入り口正面にMuseum change life＝あなたたちの生活の質を変えるのがこの館なんですよ、と書かれている。福岡市科学館でいうとそれが“学習支援”にあたるので、そういう投げかけを出して行けるならば、来られる方もこの科学館はどこに私たちが導いてくれるのかという楽しみを得られてくる。	緒方委員
可能ならばコンシェルジュがいてこの人に聞けば福岡の街や科学についてなんでもわかるというシステムがあるとこの科学館がやりたいことが顕在化するかなど。	縣委員
イギリスの科学館にはask meというTシャツを着て、なんでも答えてくれるスタッフがいる。	緒方委員
コロナの状況でどう乗り越えていくか科学館としては新しい事業への取り組みなどは考えているか。	縣委員
リモートでなにかできないかということで、スタンフォード大学の西村先生の幅広いネットワークを生かし国内・海外の様々な講師の先生とZoomつながって行う「5G&IoTデザインワークショップ」を企画した。参加者としては新しい層を開拓できている。新しいコロナ時代の科学館の発信事業として行った。	高橋
在宅勤務中に館内研究発表会を行った。いい成果になっており、スタッフが自分で考えて自分で動くようになったと感じる。というのもいまままで時間がなくて館内で調査研究ができなかったが、在宅勤務中に時間が取れてよく企画を練ったりよく勉強ができた。	高安
2020年の報告書は全く違った形になりそうだ。	栗原委員長
プラネタリウムの丹野氏がとてもいい動画を流されていた。オンライン事業を収益を上げる形でやる取り組みはあるか。	縣委員
色々なところからそういう話がある。運営費を確保しないと質も人材も低下してしまうので事務局側としては努力していかないといけない。	板里
年間パスポートを持たれている方の特典を保証しないといけない。コロナ禍で科学館に来られないのでなにかインセンティブを考えたほうがいい。これがオンラインの課金ができるようなプログラムの提供に繋がってくる。	緒方委員
6月の再開後に156人年パスを買ってくれた。期待感がすごい。	板里

4. 委員長総評

- データのとり方を評価の軸あるいは仮説に基づいてちゃんと解析できるようにしないともったいない
- コロナによっていったんリセットされているので開館してコロナ前までの流れをまとめるいいチャンス
- 学習支援、育ち支援、専門家集団なので強みをしっかり生かす
- 交流室の居場所議論から2つ新しいことがあり、学生のキャリアパスに相当する情報提供、学生が主体的に取り組む
- いいなと思った話は、県委員から出たコンシェルジュ、緒方委員から出たask meで、科学館にいろんなコンテンツや宝物があるがどういう風にめぐっていったらいいかわからないので流れを作る

コロナがあつてから入場者数が少なくなるので変えていくこと、質を上げていく方向にふる。1つのことでどれだけ質を上げるかということを見せつける。リモートに関して新しい動きはすごくいいこと。何かやったときにそれがどういう反響があつて、自分たちがどう受け止めたかという流れをちゃんと認識することとそれを伝えていくこと大事だ。

交流室に来る学生さんは科学館の入場者と溝がある気がする。彼らにインタビューして彼らから出てくる言葉の中に科学館にとつてすごく価値があるんだよという編集をするとなにかつなかりが生まれてくる。成果の編集の仕方はすごく大事だと思った。

ぜひこれまでのとりまとめこの機会を利用した新しいチャレンジについてやってもらえたらと思う。

栗原委員長